

New Chairman Interview

## 新会長インタビュー

令和6年度定時総会により清水琢三氏(五洋建設社長)が新たに会長に就任しました。  
就任にあたり抱負やこれまでの経験などについてお話を伺いました。



東京土木施工管理技士会  
会長

清水 琢三

大学時代は相撲部に所属。社長室には3人の横綱の直筆サイン手形が飾られ、元大関栃ノ心の断髪式に立ち会われるなど生粋の相撲ファンです。

「良質な社会インフラの建設こそが最大の社会貢献である」。2024年5月に東京土木施工管理技士会の新会長に就任した清水琢三氏(五洋建設代表取締役社長)は、ゼネコンの重要な使命の一つをそう語る。技術者は専門分野を極めると同時に、この使命を忘れないでもらいたいと切望する。技術者の矜持と云っていい。好きな言葉は「先見性、勇気、スピード」。物事に取り組む前によく考え、勇気を持って速やかに行動するということがある。洞察力に富む目と柔和な笑顔の対照が印象に残る。

### Q. 会長に就任した抱負をお聞かせください

A. 東京土木施工管理技士会は、土木技術に関する講習会や見学会、優良技術者の表彰、広報活動など、技術者の教育や成長を支える機会を提供しており、とても有意義な活動をしています。当社の社員もいろいろと参加をさせていただき、研さんを積んでいます。こうした地道な活動は非常に大事だと考えています。施工に関するさまざまな情報を提供する団体活動は多くないので、各社の現場も普段はお互いに見ることがあまりないのですが、技士会主催の見学会や機関誌への掲載でそれが実現しています。各社の技術力の競争はもちろん必要ですが、公共工事においては全体の技術の底上げが欠かせません。そのためにもこうした取組みはとても重要で、会長として現在の

活動をしっかりと継続していきます。

### Q. 土木を選んだきっかけを教えてください

A. 私の家業は祖父の代まで江戸時代から続く大工で、父も戦後間もないころまでは家業を手伝い、その後、ゼネコンに勤めました。ですので、建設会社に就職するのはとても自然な流れでした。大学を建築ではなくて土木を選んだのは、高校3年の時、東京大学の高橋裕教授が書いた岩波新書『国土の変貌と水害』を読んだのがきっかけです。河川をコンクリート三面張りにするなど都市の開発によって、保水機能が失われて都市水害が起こるようになった、ということを知り、土木は世の中のために役立つと思って土木技術者(シビルエンジニア)の道に進みました。

### Q. 学生時代のことをお聞かせください

A. 大学では、土木工学科の港湾研究室に入りました。海岸工学は社会との関わりが深く、とても興味がありました。研究室では砂浜に発電所などの構造物をつくると、砂浜が変形するなど、環境への影響が大きいことから、その影響を評価するため、海浜変形の予測手法を開発するという世界最先端の研究プロジェクトが進んでいました。それに大いに触発され、大学院の時は現地観測に行ったり、室内で実験をしたり、数値シミュレーションをして、現地と比較して研究していました。これが会社に入ってからとても役に立ちました。当時の指導教官が「工学」の重要性を説く先生で、「その研究や技術が、社会にどう使われ、どのように役に立つのか」を必ず問われていました。実験室と現地では外力の大きさに違いがあって砂の動くメカニズムが全く違うのです。現場に適用できる技術を開発することが重要だと認識しました。

### Q. これからの建設業界について お考えになっていることを聞かせてください

A. サステナビリティという言葉が当たり前になりました。建設事業活動のサステナビリティがどのようなものなのか、もう一度改めて整理する必要があると思います。サステナビリティは持続可能性という意味ですが、とにかく幅が広く深い意味を持っています。端的な言葉で表現すれば、社会が持続的に発展するために、自分たちはどのように行動していくかということです。その意味で広い視野が不可欠です。CO<sub>2</sub>削減など気候変動問題への対応だけではなく、労働安全、ICTによる技術革新、働き方改革への取組みは担い手確保に繋がり、さらには協力会社への適正賃金の支払いは持続可能なサプライチェーンの構築に繋がり、建設業の持続的発展に繋がります。実にさまざまな事柄が関わってきます。コンプライアンスは守って当たり前ですが、それを超えたところにサステナビリティがあると言えます。現場で働いている皆さんも含め、建設業全体でサステナ

ビリティの重要性を理解することが、産業全体を良くし、社会への貢献にも繋がると信じています。

### Q. 座右の銘を教えてください

A. 「先見性、勇気、スピード」です。これは早稲田大学ビジネススクール教授だった内田和成さんが講演で言われていた言葉です。私は入社式や安全大会などでよくこの3つのキーワードについて話をします。先見性とは何か目新しいことを思いつくことではなく、何のためにやるのか、このやり方でいいのかなど、物事に取り組む前にしっかりと考えるということです。何かおかしいと気が付いたら前例にとらわれず勇気を持って変革し、スピード感を持って実行しようと、話しています。

### Q. 若い技術者の皆さんに メッセージをお願いします

A. インフラをつくりあげた完成の喜びとともに、幅広い関係者との繋がりや建設業が持つ社会的意義を感じてほしいですね。私たち建設業の仕事は社会の発展に大きく貢献しています。そのことを若い技術者が実感して仕事に臨める環境づくりに努めたいと思います。そして、サステナブルな魅力ある建設産業にしたいと決意を新たにしています。

## Profile

### 清水琢三 会長 プロフィール

1958年京都府に生まれる。1983年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、五洋建設(株)に入社。同社名古屋支店長、土木部門土木営業本部長などを経て、2014年6月に社長に就任し現在に至る。また、日本埋立浚渫協会会長、日本建設業連合会副会長、東京建設業協会副会長などを務め、多岐にわたり建設業界関連組織においてさまざまな活動に取り組まれている。